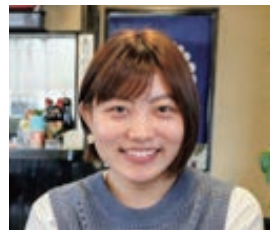


# 学生献血推進ボランティアからのメッセージ



特に若い方に対して、献血の大切さを伝え協力してもらうために積極的に活動を行っている「学生献血推進ボランティア」の方に、献血の大切さを聞きました。

大学近くのスーパーに月1度、献血バスが来ます。私はそこで学生献血推進ボランティアとして、献血協力の呼びかけに参加しています。開店前から、献血をしに10名程の方が並んで待っています。献血に関心がある方になかなか出会うことがなかったのが、初めてその光景を目にした時はとても驚きました。毎月同じように列ができていますので、献血バスで定期的に献血をしている方が多くいるのだと思います。残念ながら、このスーパーの近くには献血ルームがありません。ですから、ご協力に積極的な方がいても献血できる機会が限られています。献血推進活動をしていると、献血未経験者の献血に対する痛い・怖い・時間がかかるというマイナスイメージを強く感じます。献血はたった40分で命を救うボランティアです。近くに献血ルームや献血バスが来る場所がある方は、マイナスイメージに臆することなく1度足を運んでみてください。人の温かみを感じられる素敵な体験になるはずです。



全国学生献血推進実行委員会  
全国委員長  
磯山 春佳 さん

私は先天性の病気の手術中、大量出血で輸血を受けました。輸血を受けた時の記憶はありませんが、術後、両親から手術の話をした時に輸血のことも聞きました。両親も、「まさか自分の娘が輸血を受けるとは」と言っていました。

大量出血をした時、私は「輸血」で助けられました。もしあの時、輸血が無ければ、今、元気に大学に通うことができなかったかもしれません。

あなたは「輸血」がどんな時に必要だと思いますか？

手術中や怪我の大量出血でも必要ですが、ほとんどが病気の治療に使われます。今もなお、「輸血」が必要な患者さんが沢山いらっしゃいます。突然、あなたの大切な人に「輸血」が必要になるかもしれません。

私は輸血経験者の1人、また大学生の1人として神奈川県学生献血推進連盟に所属し、献血の推進活動をしています。

高校生でも16歳以上なら献血にご協力いただけます。あなたの少しの勇気で助かる命があります。命を救う、身近なボランティア「献血」。ご協力をお願いします。

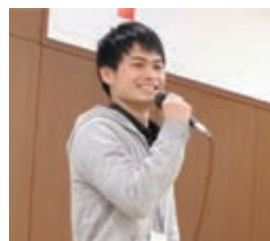


神奈川県学生献血推進連盟  
稲村 はづき さん

祖母ががんを宣告されていた私は、献血した血液の多くが、がんの治療に使われていることを知り、献血推進ボランティアへの参加を決めました。当時の私は、輸血は不慮の事故にあった際に使われるイメージを持っていたので、献血した血液の80%以上が病気の治療に使われていると聞いた時は、イメージとの違いに驚き、自分は何も知らないなと感じました。

活動を続けていると「母が病気で輸血を受けています。誰かが献血してくださっているから治療ができていると思うと、このような活動がすごく嬉しい。ありがとう」と、言ってくださる方がいました。この言葉が活動の励みとなると共に、献血をするということが人の支えになっていることを実感しました。

それ以来、献血バスへと向かっていく方達を見ると、心が温まり元気づけられます。知らない誰かを想う、その想いが血液として患者さんへと届けられる。その一端に関わることができていることを嬉しく思っています。



和歌山県学生献血推進協議会  
古川 晴太郎 さん

